

高度外国人材は企業の突破力、最新技術CASE開発を担うメキシコ人。



情報制御モデル開発部

ベガ・ラミレス・アントニオ (27才)

Vega Ramirez Antonio

- メキシコ出身 ●グアナフアト大学出身
- 入社2年目 ●担当業務：統合制御システムの開発

日本語能力よりも将来性。 ダイバーシティが企業の未来を切り拓く。

日本のものづくりを、世界に誇るオンリーワンテクノロジーで「車」へと体現し続ける企業、マツダ株式会社。多くの海外拠点を持つ言わずと知れたグローバル企業として、外国人材の採用も積極的に行う。例年10名前後の外国人留学生を採用する中で、社内でのダイバーシティも浸透。すでに「外国人」という言葉の枠を超え「仲間」として働く環境が醸成されている。「外国人留学生は『挑戦』の心意気が強く、元々マツダの社風にマッチしているんです。軸を持って臆することなく意見できる外国人材には、固まっている雰囲気や壁を打破する突破力もある。自分の知識を伝えながら新しいものを生み出していく研究開発や生産技術、製造の領域では、とりわけ活躍が期待されています」と人事本部人材開発部採用グループ 黒西潔氏。その将来性を見込み、語学力については入社後の伸び代を勘案。採用面接で日本語コミュニケーションに多少の不安があっても、技術力の高さが確認できる優秀な人材であることが認められれば、採用することにしているという。

就業人口の大幅な減少が深刻さを増す日本において「事業継続のためには、外国人材の戦力化が必要だ」と黒西氏。入社時のモチベーションを高めそれぞれの能力や知識を最大限に活かすことができるよう、配属は入社時の希望調査にできるだけ沿った形で行う。また、入社後3年間は、メンターの役割を果たすペアコーチを設定。仕事から日常まで交流をベースに気軽に相談できる体制を整えるなど、きめ細かなフォローを行っている。「ダイバーシティを受け入れるというのは、企業がこれから前へ進む上で必ず通らなくてはならない道。全ての社員とともに、今はそこに行くまでの長い助走路を一緒に走っているのだと思っています」。

海を渡り子供の頃から親しんだ会社へ。 マツダの最新技術CASE開発を担うイノベーション力。

●出合いが出合いを呼び、毎日新しいことが勉強できる 希望の部署で仕事に熱中。

ベガ・ラミレス・アントニオさんは、マツダのメキシコ工場がある、メキシコ・グアナフアト州サラマンカ市出身。「工場は父の家からほんの10分くらい。子供の時から『zoom-zoom』のCMをテレビで見たいし、大学ではマツダの歴史について習ったこともあります」と言うほど、メキシコにいた時からマツダは身近な存在だった。そのマツダがある広島に来るきっかけとなったのは、アシスタント・ティーチャーとして働いていたグアナフアト大学に、広島大学の高品徹大学院工学研究科特任教授が来訪したことだった。アントニオさんの大学時代の専門は、電気・電子工学。高品教授から、広島大学大学院への進学が日本企業への就職へのチャンスとなると聞き、新しい活躍の転地を求めて留学を決意。入学後、広島メキシコ合衆国名誉領事館名誉領事でマツダ株式会社相談役の金井誠太氏と話す機会があったことや、YouTubeで見つけた代表取締役副社長の藤原清志氏の「Defy Convention」(常識を打ち破る意志)という言葉に感銘を受けたこ

とから、マツダへの思いをさらに強めたのだと言う。

現在アントニオさんが手掛けているのは、マツダが力を入れるCASE技術^(*)

の、C(コネクテッド)の部分の開発だ。MAZDA3やCX30では、コネクティビティ技術で車体がスマホアプリと連携、車のコンディションに関する情報やナビなど、さまざまな機能を利用することができる。アントニオさんは専門の電子工学の知識をフルに活かし、3年間の新任研修(骨太研修)で、配属された統合制御システム開発本部で、車体の電子基板を設計。大学院時代から興味があった魂動デザインの知識を活かすことができる場面もあり、「希望の部署に入ることができて、本当に嬉しかった。毎日新しいことが勉強できるこの仕事が大好きです」と笑顔を見せる。



●マツダの開発プロセスを、完璧に自分のものへ。歩みをやめない向上心。

何気ない日常の中で見つけた日本らしさからも学びがあるとアントニオさん。「大学院生の時にした引越越し屋さんのバイトで、そのバイト先の社長から『お客様の荷物は、ゆっくりと丁寧に』と教わりました。車も同じです。お客様が乗ってくださるのだから、部品ひとつひとつでも、丁寧に扱わなくてははいけません」と、クルマづくりへの思いは真剣だ。一方で、日本で働くうちにすっかり仕事に熱中するようになった自分は「メキシコ人から見たら、変な人だと思われるかも」とジョークを飛ばしたりと、陽気な性格で言葉の壁も感じさせないほど周囲に溶け込んでいる。

現在開発する技術の中には、アントニオさん自らが提案し採用された部分もあるのだという。「自分の考

たシステムが採用された時が今までで一番嬉しかった。これからも先輩や上司に相談しながら、同期の皆さんともしっかりディスカッションし、マツダの開発プロセスを完璧に学んで、自分のものにしたい。そしていつか、大好きなロードスターに自分の手でコネクティビティ技術を導入したいです」。



(右) 人材開発部採用グループ サブ 黒西 潔氏

(中) アントニオ氏

(左) 人材開発部採用グループ 担当 小栗栖 康正氏

企業メッセージ

就業人口が減少していく日本において、外国人材の受け入れによる職場のグローバル化は着実に進み、数十年後には、日本人、外国人と区別すらなくなっているでしょう。多様性は欠点ではなく、長所です。今、日本企業で働く元留学生の方々には、多様性社会の先駆者として、明るく元気に、粘り強く、日本のモノづくりを支えていってくださることを期待しています。